

## 昭和四十年を迎えて

戦後、二十年を迎える。

その間に、日本の社会は安定し、人心も落ち着いてきたともいえる。その反面、文化国家日本の建設、世界平和に寄与する新日本の建設という意気ごみもうすれ、一日が事なくすざればよいという消極的な小市民的風潮が、われわれの生活全般を蔽いはじめたようにも思う。

教育界においても、戦後間もなく盛になつた新教育の活気ある息吹は、いつしか影がうすれ、受験勉強や進学準備の波にのまれてしまった。新日本の必要とする人間は、どのような教育を必要としているかという根本的反省を、どこかで置き忘れてしまっているような気がする。

幼児教育界においては、戦前からずいぶん新しい教育がなされていたので、戦後とくに百八十度の転回の要もなかった。しかし、幼稚園の急増によって、教育理論と実際との間にズレを生じ、全般的に粗雑になつたきらいはまぬかれない。今後、幼稚園、保育所の増設は続くだろうから、正しい幼児教育の普及に、多くの人の努力が必要なときである。本誌も、そのための役割の一端をにないたいと念願している。多くの方々の御協力をお願いする次第である。教育界の世界的傾向としては、知的なものがとくに強調され、全人格的な配慮がやや薄れてきているような気配がある。これは、米ソの宇宙開発競争の結果とも言えるのである。知的な面の教育は、もちろんたいていである。真に知能を開発するための教育の研究はもっとなされるべきであろう。しかし、米ソの核戦争の競争のあり方を、日本の教育界が受ける必要はないだろ

う。先日、本誌で紹介したことのある有名な心理学者夫妻が日本にこられたことがあった。それは、遊びの精神衛生的価値についての研究であつたが、第一に私に尋ねられたことは、自分の考えは日本で受け入れられるかという問であつた。米国では、目下、幼児期から、科学教育につながる認識の教育の研究が盛で、幼児の全パーソナリティの考慮に立つた教育が圧迫されがちだという。自分たちはそのために戦わなければならぬのだと言つておられた。

私も、日本の幼児にとって、何が必要であるかを考え、幼児がほんとうに満足する幼稚園、保育所の形成に努力せねばならないと思う。幼児が満足ある生活をすることを、親も喜び、社会も喜ぶようになれば、日本の社会は健全に発展しつつある証拠だと言つても過言ではなからう。

昭和四十年代が、幼児教育の正しい発展の年であることを願う。